

2020年1月19日 川越教会

## 夜の海に響く声

丸山 勉

### [聖書] ヨハネによる福音書 6章 16～21 節

夕方になったので、弟子たちは湖畔へ下りて行った。そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった。強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。イエスは言われた。「わたした。恐れることはない。」そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。

### [序] 聖書の奇跡物語

聖書はまるでサイコロのように多面的な色々な側面をもっています。歴史の書物であり、伝記の書物であり、預言の書物であり、古代の讚美歌集であり、また、手紙でもあります。そして、**その中を貫いている一本の柱**があると思います。それがなければ、それは単なる歴史の本になり、単なる物語、また手紙となってしまいます。それは何でしょうか。「**神様の語りかけ**」です。「神様の語りかけ」がまずあり、**それに人間たちが応答していった、その中で生まれた、或いは編纂されていったもの、それが「聖書」**です。「聖書」は当然といえば当然ですが、神様ご自身が書かれたものではありません。しかしまた、人間が小説を書くように、自分の頭の中だけで創作したものでもありません。**神様と人間のダイナミックな関わりの中で**、また、具体的な歴史の中で、信仰者を励まし、慰め、また伝道の目的をもって書かれた書物です。「聖書」(「バイブル」)は、「聖」という言葉はもともとあった訳でなく、元は単に「ブック」ほどの意味でした。

この聖書の中には様々な「**奇跡物語**」が記されています。今日の聖書箇所もその一つですが、このような物語の存在につまずきを覚えた方もおられるかもしれませんし、または、周りの人から「あなたはそんなおとぎ話のようなことを信じているの？」と聞かれて返事に窮したという方もあるのではないのでしょうか？ しかし、私は奇跡物語については、このように言うことが出来るように思うのです。一私たちは、奇跡を信じられるから信仰者になった、クリスチャンになったというより、信仰を与えられたから、奇跡も信じているのです、と。

週報にもお書きしましたがけれども、聖書の「奇跡物語」について、もう初めか

らバカバカしいと拒絶してしまうことも出来るわけです。けれども、「この物語は良くは分からないけれども、今の私にとってどんなメッセージが隠されているのだろうか？」と求めて読む時、心に示されることがきっとあるのだと思います。イエス様の「譬え話」もそうですが、奇跡物語も、数学のような唯一の「解答」がある訳ではありません。神様からの聖霊の自由な導きの中と示しの中で、客観的にではなく、実存的に、“私（たち）にとって何を神様は語っておられる？”という視点を持ちながら、聴こうとすることが大事なのでないかと思います。

## [1] 信仰の表明のために

さて、今日のイエス様のいわゆる「海上歩行」の奇跡ですが、この物語の意味というものは、他の物語も同じだと言えますけれども、その流れ・文脈と深い繋がりが**ある**と思います。この物語が記されているのは、ヨハネによる福音書の6章です。これはとても長い章なのです。全部で71節あります。ヨハネ福音書の中で最長です。そしてとても大事な章になっています。

ヨハネ福音書の6章は、この物語を挟んで、6章前半が「**五千人に食物を与える**」という奇跡物語があり、後半はイエス様の「**わたしは命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない**」というイエス様の**招きの説教**があって、この章の最後の部分は、当時かなりの数の、イエス様について行った者たちがいましたけれども、その中の多くの者たちが実はイエス様のもとを離れ去っていく中で、弟子の一人**シモン・ペトロは、イエス様への信仰の表明をする、**という流れになっています。その流れが大事です。それはつまり、このヨハネ6章とは「**イエス様とは一体どなたなのか**」ということを探る物語なのであって、このイエス様を、私にとってまことの神様だと表明するということは、海（ガリラヤ湖）を渡って向こう岸に渡るということに等しいのだ、ということ語っているように思うのです。

「イエス様は命のパンである」というテーマは、来週の主日にご一緒に考えて行きますが、今日は、この海の上の奇跡について見て参りたいと思います。

## [2] 嵐の中で信仰が新たにされる

この物語は色々な所に注目出来ると思いますが、私は今回ここを読んで、海の上を歩くイエス様の姿を見て弟子たちが「**恐れた**」と書いてある所は無視できない部分だと思ったのです。それまで居なかったイエス様がこの荒れ狂う湖で現われて下さったのですから喜んでも良いと思いますのにそうではなかったというところに逆にリアリティーを感じるのです。他の福音書には「**幽霊だと思**

叫んで」(マルコ 6:49)と書いています。時は夜でもありますし、しかも海の男でさえももうダメなのではないかと思うような、荒れた湖のど真ん中です。つまり、実物のイエス様がこんな場所におられる筈はない、あれは幻、幽霊だと瞬時に思い、この状況がかえって恐くなったのではないのでしょうか？

そして、これは「教会」の物語でもあるのです。聖書における「舟」というのは、古来から、ノアの方舟の話もそうですが、「**信仰共同体**」、「**教会**」になぞらえて捉えられて来ました。「舟」というのは、目的地に向かう移動手段であります、**「海」の上を進んでいかなければなりません。海の下は、滅び、死**です。しかし、**海に風や波は付き物**でしょう。しかも、このガリラヤ湖はすり鉢状の地形にあり、予測が出来ない嵐がいつ襲ってくるか分からない、そんな場所であるようです。**私たちの人生そのもの**ですね。或いは、信仰共同体である**教会**も、「**こんな筈ではなかった**」という嵐に遭遇するということが幾度となくある、とも言えます。

実際、この福音書が書かれた1世紀の末頃というのは、**ユダヤ教からの迫害**が強くなり、イエスを主と仰いで生きる共同体は、「ここから出て行け」と、ユダヤの会堂からは追放されたのです。また、**ローマ帝国からの迫害**も本格化してくる、とても厳しい時代であったようです。正に「**嵐の中の教会**」であったのです。そういうことを反映してこの物語は書かれているとも言われています。そして「嵐」はいつも時代も、またどんな教会にも襲ってくる、その中で**主イエスとは誰なのか**、それをこの物語は語っているのだと思います。

真っ暗闇の夜の湖。目的地に舟を漕ぎ、進めている弟子たち12人。舟は大分進みました。そこに強い風が吹き、嵐がこる。しかも聖書は丁寧に「**既に暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところには来ておられなかった**」と書いています。でもよく注意して下さい。「**まだ**」と書いてあります。イエスが彼らを見放したとは書いてありません。弟子たちの方が、この嵐の中でイエス様を見たのに、信じられず、恐れたのです。幽霊だと思ったから？「**幽霊**」という言い方は象徴的だと思います。「**生きているお方**」とは思えなかったということでしょう。それまで自分が知っていた“**人間イエス様**”とは違う方がそこに現われたので、その時の彼らは受け止め切れなかったのではないのでしょうか。そして、それでいいのだと思います。「**信仰**」というものは、絶えずこれまで**勝手に思っていたイエス様像が崩されて、新しくされる**ということだと思っからです。信仰のために必要な船出だったのです。

### [3] 「新しいイエス様」を迎えよう

しかし決定的なことは、彼らは、この夜の荒れ狂う海の中で、“**幽霊**”に出会っ

たのではありません。彼らは、“**生きている方**”の「**声**」を聞いたのです！—「わたしだ。恐れることはない」！—「わたしだ。恐れることはない」。まさしくわたしののだ、と！ さっきまでは「まだ」彼らのところに来てはいなかったイエス様が、「今」、幽霊でなく、**生ける方として、生ける神として**、彼らに「**恐れる必要はない、なぜなら、わたしこそあなたの神なのだから！**」とおっしゃっているのです。

彼らは、自分たちの**不信仰**に気付いたことでしょう。彼らはイエス様に召されている者たちでありながら、「**ここにはイエス様は居られない。私たちは見捨てられたのかもしれない**」と思ったと思います。しかし、そうではありませんでした。先ほどご一緒にお読みした**詩編 46 編**には、「**苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる**」とあったではありませんか！ 「**必ず**」というお約束があるので。イエス様は、この夜の海の上でそれを証明して下さいました。

しかもこの奇跡物語は、他の福音書では例えば「イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり」（マルコ 6:51）と書いてあるようですが、ヨハネ福音書では風が収まったことには言及していないのです。ただ「イエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく舟は目指す地に着いた」となっています。もしかすると、**まだ風吹く、闇に覆われた夜の海であったのかも知れない**のです。しかし、彼らは、これまで知らなかった**新しいイエス様を迎えたのだ**と思います。そうしたら、「舟」が弟子たちを、「**目指す地**」まで運んだのです。あなたは滅びない、教会も滅びない、“嵐の中”を向こう岸に渡って、そこで新しい歩みを与えて下さるのです。

信仰生活というものは、いつも「**新しいイエス様**」を迎えることなのですね。それは、言い換えれば、固定化しない、観念化しない、生けるイエス様といつも新しく出会うことだと思います。昔信じたからもういいや、ではないのですね。だから私たちは、毎週ごとにイエス様の福音の言葉に触れ、また、自ら聖書を聖霊に導かれながら読むことが必要なのだと思います。そしてその中で、こんな、神様はもう居られないと思っていた絶望の場所にもイエス様は生きておられるのだ、私たちが滅びの海から助け出して下さるのだ！ いや、既に助け出して下さったのだ！ということを知られる。——信仰はその連続だと思います。

どんなことが人生に起ころうが、私たちは「神様に見捨てられた、見放された」などと思う必要はありません。イエス様は、海の上を歩いて、弟子たちの困窮の最中へと近づいてこられました。**何という自由**でしょうか！ イエス様が海の上を歩かれたのは、私たちが放って置かない、必ず救うという、その**憐れみの大きさ、愛の強さ**の故です。そしてそれが最も大きく示されたのがあの**十字架**ではな

いでしょうか？ 神様の愛はどこまでも私たちを追いかけてくる。私たちが海の底どころか、**神様への反逆と罪**の故に架からねばならない滅びの十字架を、代わりに負って下さるほどにイエス様は私たちを愛し抜いて下さったのです！

私は最近知って驚いたのですが、**イエス様が海の面(おもて)を自由に動くことが出来る方**であることは、あの**創世記**の初めのところで既に暗示されているという解説を聞きました。こうあります。創世記1章2節です。

**「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」。**

聖書冒頭にある、天地創造直後の、混沌と闇が支配している世界です。そこに原初の水の集まりがあった。そして、その水(海のようなもの)の面を神の霊が動いていた、と言うのです。今日の箇所を彷彿とさせるではありませんか！

思い起こして頂くと、ヨハネによる福音書は、1章冒頭の**「はじめに言葉があった」**という言葉で主イエスを「神の言葉の受肉・成就」と捉えましたし、やはり1章の**「闇は光に勝たなかった」**(口語訳)という表現で、創世記の**「光あれ。こうして光があった」**という言葉を念頭にしながら、**イエス様こそ闇に打ち勝つ「まことの光」**であることを証しました。そしてさらに、真つ暗闇の海の面を、私たちのために動き、近づいてこられる存在がある。その方こそ、創世記の冒頭で語られている、水の面を動いていたという、**神様の霊に満ち満ちたイエス・キリスト**なのだ、とこの物語は語っているのだと言うのです。本当にそうなのではないでしょうか。ちょっと不思議な気もするのですが、新約聖書のコロサイの信徒への手紙の中では、**イエス・キリストは天地創造のはじめから存在している方だ**、という言葉もあるのですね(コロサイ1:17)。神ご自身に等しいお方なのです。

**【結】 イエス様にあっては、闇も光も、代わる場所がない**

海の上をイエス様は歩かれ、「わたしだ。恐れることはない」とおっしゃいました。**「海の面」は、死と生の境目**だと言っても良いと思います。けれども考えてみると、私たちはいつもその境目で生きています。人間存在とはそういうものなのです。この私たちの命は、いつも死に脅かされています。いつその中に飲み込まれるか分からない。闇の中の嵐の海のような不安に支配されることがあると思います。また、死んだらどうなるのだろう？ という、存在そのものの不安があります。けれども、安心してよいのです！ただお一人、**イエス・キリストは、生と死を支配できるお方**のだと、海の上を歩かれることによって示して下さいました。私たちの存在は、**「死ぬべきからだ」**(パウロ)ですが、その死に定められた私たちの存在の中に、**十字架と復活のイエス・キリストがまことの光として、まことの命として**入ってきて下さって、私たちを**「目指す地」**、それは究極的には**神様の国**でしょ

うけれども、そこに到着させてくださるというお約束がここにあるのです。

招きの聖句として読んで頂いた詩編 139 編 11～12 の言葉をもう一度お読みしたいと思います。新しい響きで聞こえてくるとと思います。

—「闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光が私を照らし出す。闇もあなたに比べれば闇とは言えない。夜も昼も共に光を放ち、闇も、光も、代わる場所がない」。

お祈りを捧げます。